



特集 ● 「Home Coming Day」

1/7(土)~8(日)に開催され、湖医会賞受賞者の講演や医学科1期生による座談会のほか「ぶらり滋賀医大」「湖医会玉手箱」「学生との交流会」に多くの卒業生の参加がありました。



同期会 ●

医学科1期生の卒後30周年会は「守山会」として1/7(土)に開催されました。また、医学科11期生、21期生の卒後20年会、10年会が同日に、看護学科5期生の卒後10年会が2/11(土)に開催されました。

鹿児島支部 ●

「湖医会」に鹿児島支部が誕生し、11/12(土)に支部会が開催されました。

CONTENTS

30周年記念号の発刊によせて	2	支部会 関東支部会	14
「湖医会」創立30周年記念事業について	3	鹿児島支部会	17
特集「Home Coming Day」		保健師部会	19
○第1回Home Coming Dayを共催して	4	海外からのメッセージ	20
○「湖医会」30周年記念Home Coming Day	5	私の研究から	22
○医学科1期生有志による座談会	6	開業苦労ばなし	23
同期会 守山会(医 1期生)	7	東日本大震災あの日	24
卒後20年会(医11期生)	8	学生表彰(平成23年度)	27
卒後10年会(医21期生)	10	総会報告	28
卒後10年会(看 5期生)	12		

「湖都通信」30周年記念号の 発刊によせて



「湖医会」会長
渡辺 一良 (医2期生)

同窓会「湖医会」は1981年3月に創設され、昨年30周年を迎えました。

この間、実に様々なことがありましたが、昨年の3.11東日本大震災はまさに未曾有の、そして今なお続く災禍であります。被災された方々にはこの場をお借りして心よりお見舞い申し上げます。

われわれ「湖医会」会員は、それぞれの立場でできる限りの協力・援助活動などを行ってまいりました。本号にはその一部を紹介させていただいております。

さて、「湖医会」の創立30周年を迎えるにあたり、本会ではHome Coming Dayをはじめとするさまざまな記念事業を計画、実施しております。その一環として本号を「湖都通信」30周年記念号としてお届けすることになりました。

特集では、新年早々の1月7～8日にわたって開催した“Home Coming Day”を取り上げました。大学との共催で行う初めての試みでしたが、第1期生の皆様のご尽力を得て多くの卒業生や現役の学生、教員の皆様にも参加いただき、とても盛会であったことを喜んでおります。この模様は、馬場学長はじめ皆様から報告していただきました。また、同時に開催された3つの同期会（10年、20年、30年の各同期会）についても楽しい報告が寄せられました。

うれしい話題としては、「湖医会」鹿児島支部が誕生しました。老舗の関東支部会報告に並んでその経緯や初会合の様子が紹介されています。これを契機に草の根運動的に各地域で支部会が発足することを期待しております。

開業苦労ばなし、海外からの声、日々の活動の様子など盛りだくさんの内容になり、30年間の積み重ねが垣間見られるものとなっております。

装丁の面では、カラー化され誌面構成がリニューアルされた「湖都通信」はいかがでしょうか。これを機に、自画自賛、つぶやき等々 会員に伝えたいことをどしどしお寄せいただき、会員相互の情報共有の場として「湖都通信」がますます充実していきますことを願っております。

「湖医会」 創立30周年記念事業について



創立30周年記念事業実行委員会 事務局長
茶野 徳宏 (医10期生)

同窓会「湖医会」は、昭和56年3月に医学科1期生の卒業と同時に創設され、昨年30周年を迎えた。

記念事業については、平成22年2月の幹事会において渡辺会長を委員長とする創立30周年記念事業実行委員会を設置、同年の総会にその各事業の実施について承認され、その後、事業の具体化を進め以下のとおり実施してきた。

(1)「Home Coming Day」

事業メインの企画である。卒業生が母校に集い、大学の発展・変化を確認し、同時に同期会などを開いて旧交を深めていただく日とした。湖医会賞受賞者の講演や医学科1期生の企画による座談会のほか“ぶらり滋賀医大”“学生との交流会”“湖医会玉手箱”と盛りだくさんの内容で本年1月7日～8日に開催した。詳細は本誌にてご覧願いたい。

(2)「地区メーリングリストの整備」

地方会や支部の立上げに繋がることを期待し運用をスタートした。運用当初、若干のトラブルがあったが校正し再スタートしている。大いに活用していただき、ご意見もいただきたい。

(3)「奨学金制度の見直し」

対象の人数、学年、金額など奨学生の支援枠を拡大することとした。運用の効果が上がる良い制度としていきたい。

(4)「湖都通信記念号の発行」

本30周年記念号を機にリニューアルして発行して行く。より充実した紙面としたい。皆様の寄稿、ご意見を歓迎する。

(5)「求人・求職情報の充実」

医療従事者、同窓生間の情報交換の場となるようにSNSの構築を計画した。しかし、本格的な稼働には至っていない。今後持続的に取り組みたい。

(6)「湖医会文庫」

会員からの寄附や図書の管理方法等、円滑な運用に向け検討を行ってきたが、大学図書館の制度上の問題もあり、実施するには至っていない。

(7)「学生活動支援事業」

昨年秋の定時総会で追加事業として認められ、総枠300万円ほどの課外活動団体(クラブ)への設備品の助成事業で、現在希望物品を募っている。

以上事業の全容を示した。記念事業の実施に際しては、ご参加、ご協力いただいた方々に深く感謝申し上げますとともに、これらの事業が実を結び、次の10年に向かって「湖医会」がますます充実していくことを願うものである。

特集

Home Coming Day

第1回 Home Coming Dayを共催して

滋賀医科大学長 馬場 忠雄



本学同窓会「湖医会」との共催で、第1回Home Coming Dayを本年1月7日、8日に盛会に開催できたことを大変うれしく思っています。同窓会の創設30周年記念事業ともタイアップし、第1期生、第11期生、第21期生を中心に7日の夜には、同期会が近くのホテルで開催されました。翌日には久しぶりに母校のキャンパスを歩いて、その間の変貌ぶりに少し戸惑っておられた方もおられたようです。とくに、附属病院は平成17年から再開発中であり、本年3月末に完成の予定ですが、D病棟、その6階の展望レストラン、小児病棟、スキルズラボ、新手術棟、ライトコートのコピニエンスストアなど、患者さんのニーズに対応し、機能性が向上した改装に共感をいただきました。

クリエイティブ・モチベーション・センターにおいては、現在の瀬田駅周辺や通学路の風景のビデオが放映され、医学科1期生～30期生、看護学科1期生～13期生までの卒業アルバムが並べられ、卒業当時の恩師や同級生の姿に学生時代を懐かしんでいただきました。

12時からは、学生との交流会が福利棟1階で開催され、当時のクラブ活動などの話に花が咲きました。

午後1時からは、私から「大学の現状について」開学時から続いている献体受け入れや比叡山延暦寺の阿弥陀堂での解剖体慰霊法要と納骨

式を、また新しいカリキュラムの取り組みとしている地域基盤型の教育、少人数能動学習、CBT、OSCE、さらに本年度からのスチューデント・ドクターの導入、そして、地域医療を志す学生に対応した里親による学生支援、などを紹介しました。研究については特徴としている5つのプロジェクト、附属病院の活発な質の高い高度医療と先進医療の取り組み、さらに産学連携の取り組みを報告しました。湖医会賞受賞者の講演に引き続いて、第1期生7名の教授(前川聡、来見良誠、笹原正清、藤宮龍也、峯子ご夫婦、鈴木康夫、高橋正行先生)の方々をパネラーとして、司会を前川、来見教授で、本学からは私、服部、柏木両副学長が参加し、大学に期待するものが話されました。

念願のHome Coming Dayは湖医会の渡辺一良会長はじめ役員の方々、事務局の奥野さんなどのご協力とご尽力により成功裏に開催することができました。

大学も国立大学法人となり、大学の評価が厳しく問われる現状にあります。すなわち、大学が国立大学として存在する意義が問われており、大学における教育、研究、診療の実績の評価は勿論ですが、卒業生の活躍も評価の一つになります。お陰様で本学の卒業生のうち36名が教授として大学の教育、研究に携わっており、また、それぞれの専門領域では指導

医や専門医として学会などで、また、健康福祉分野においても、地域から国際的に至るまで活躍していただいています。

今回のHome Coming Dayを契機として、各地で活躍しておられる同窓生の情報交換の場として、各地に支部会が有志の方々のご協力により組織されることを願っております。支部総会時には、大学から近況を報告し、母校との交流が一層活発化することを期待しているところであります。現在、関東支部会が毎年夏に定期的に開催され、私も学長就任以来、毎年出席させていただき、近況を報告しています。最近、鹿児島支部会が、西尾善彦先生が鹿児島大学内分泌代謝の教授に就任されたのを受けて組織されたと聞いております。

大学は、優れた医療人を育成するところではありますが、卒業生が母校を訪れ、最新の医療や技術の取り組みを知っていただく機会を提供するところでもあります。

第1回Home Coming Dayが、卒業生と本学を結びつける「絆」の出発になれば幸いです。

「湖医会」30周年記念 Home Coming Day

茶野 徳宏 (医10期生)



滋賀医科大学同窓会「湖医会」発足30周年に当たり、記念事業の一環として準備されていたHome Coming Dayが本年1月7-8日にかけて開催された。当初は「湖医会」が中心となって準備を進めたが、その後大学の協力を得て、“同窓生が改めて自由に大学に帰学、観学できる日”とする、初めての記念日として共催されることとなった。

土曜(一日目)の夜は医学科1期生の守山会、11期、21期生の卒後20年、10年の各同期会を併催していただき、土曜の午後と日曜(二日目)の午前には改築された大学、附属病院を見学できるツアーを企画する等、なるべく幅広く同窓生が集まれるよう工夫された日程となっていた。日曜の午後からはメインのイベントとして、大学の現況報告、湖

医会賞授賞式・講演会、医学科1期生による座談会、が開催された。馬場学長からは、学生の生活、国家試験の状況、病院・大学の現況等、簡潔に紹介があった。その後、湖医会賞講演会では、前田士郎先生(医5期生)より「ゲノムワイドな糖尿病関連遺伝子研究～オーダーメイド医療を目指して～」、岡田明先生(医18期生)より「インド・ダラムサラにおけるチベット難民に対する眼科医療協力NGO活動」として、それぞれ特徴ある講演がなされた。前田先生からは世界トップレベルの糖尿病ゲノム解析研究の紹介があり、オーダーメイド医療を目指した今後についての熱い意欲に圧倒されることとなった。岡田先生からはインド・ダラムサラ地区に於ける10年に及ぶ眼科医療活動について紹

介があり、活動継続の動機は医療人の原点に立ち返り自分自身を見つめ直す為にあると吐露された。学生を含め聴衆に強い印象を与える講演であった。その後、医1期生有志による座談会「滋賀医科大学の過去・現在・未来～30年をふりかえって～今後の滋賀医大に望むこと」が開催された。本座談会の詳細については企画者の前川先生より紹介があるので、ここでは割愛する。

Home Coming Dayは初めての開催であったが、学生、卒業生を含め、参加者は延べ120名に及び、工夫された内容も含め、盛会であったと考えている。開催にあたっては、諸処細々にわたり準備を進めて下さった湖医会事務の方々、大学事務の方々、深く感謝の気持ちを伝えたい。

特集

Home Coming Day

3



Home Coming Day の企画として、医学科1期生有志による座談会「滋賀医大の過去、現在、未来 30年をふりかえって 今後の滋賀医大に望むこと」が、馬場忠雄学長、服部隆則副学長、柏木厚典病院長に陪席いただき、笹原正清教授(富山大学)、鈴木康夫教授(東邦大学)、高橋正行教授(びわこ成蹊スポーツ大学)、藤宮龍也教授(山口大学)、藤宮峯子教授(札幌医大)に参加いただき、本学来見、前川の司会で行われました。このように多くの1期生の教授が一堂に会した企画ははじめてのことでした。

参加者の略歴紹介の後、1期生は、先輩がいなくて大変であったが、フロン

ティア精神でいろいろなことにチャレンジし、若鮎祭など現在の滋賀医大の基礎をつくったことや教員と

医学科1期生有志による座談会



前川 聡(医1期生)

学生の距離が近かったことなど滋賀医大の創設期における学生生活の紹介がありました。次に、学外の先生からの滋賀医大の評価や卒業生が全国で活躍していることなどが紹介されました。また、久しぶりに滋賀医大を見学し、新病棟やスキルスラボの充実に感心したことなどの評価をいただきました。

医学教育の現状や研修医対策、さらに、研究の活性化など、本学を含めた医科大学の課題について討論し、服部副学長や柏木病院長からコメントをいただき、最後に、馬場学長から講評をいただきました。司会の不手際で十分に討論ができなかったことは否めませんが、学生をはじめ、多くの先生方に参加いただき有意義な座談会になったと考えます。

今後も1期生が滋賀医大出身というプライドをもって、後輩の目標となれるようチャレンジしていく決意を新たにしました。

■同期会 医1期生 こだわりの同窓会「守山会」

水上眼科耳鼻咽喉科 院長 水上千佳司 (医1期生)

卒業してはや30年。10年目、20年目の同期会にも参加しましたが、今回の同窓会には特別な想いがありました。気になっていたの是一緒に卒業した仲間だけではなく、一緒に入学した仲間達です。過去の2回の会では卒業した仲間だけでしたが、今回は何としてでも入学時の仲間達とも再会したい。この想いが今回の守山会となりました。(会名の由来:滋賀医大は開校当初2年間大津市瀬田ではなく守山市に仮校舎があった)

こだわりのポイントは3つ。1、第1回入学生同窓会(守山会)としたこ

と。(前述)2、温泉旅館で開催したこと。3、インターネットを駆使したこと。(写真、案内、情報提供など)

1月7日午後6時15分びわこ温泉『紅葉』の表の間、参加者36名、席順は入学当時の順番。前川聡君の司会でスタートした。初めに物故者(落合、平野、宮本君)への黙祷を佐藤功君、乾杯は最も遠い札幌から来てくれた藤宮(中嶋)峯子さんをお願いした。参加者全員の挨拶は不可能なので、昨年9月に瀬田松泉の会(幹事:野末富男君)に参加していない先生を中心に挨拶していただいた。留年し遅れて卒業し

た先生から「同時に入学した仲間との記憶の方が同時に卒業した仲間よりも多い」との言葉を複数の先生から聞くことが出来た。幹事として守山会にして良かったと実感できました。あちらこちらでワイワイ、ガヤガヤと楽しい会話が弾みました。2次会は旅館内のバー「紫香楽」。一次会とは違ったグループで盛り上がり、あっという間の4時間でした。

更に旅館に宿泊した人達は翌日の午前1時まで402号室での三次会を楽しんでいました。

次回の幹事は小杉厚君です。



同期会 卒後20年会

11期生同期会のこと

1・2学年担任 元独語教授
林 昭



1月7日の医学科11期生卒後20年同期会にお招きに預かり、野崎、土井田両先生と林が同席させていただきました。

幹事の石川、福留両氏の司会のもと、スクリーンに映し出された各自の入学時の写真などを背にして、39名の参会者諸氏が近況報告をされました。諸氏の進まれたそれぞれの分野でのこれまでの体験や生活の推移などが語られましたが、時に子育てをめぐるエピソードを交えながらの軽妙なスピーチの連続で大いに座は盛り上がりました。互いの報告を聞きながら諸氏は、〈人生の五月〉の六年間をかけて生まれ、今に繋がるものを培ったAlma Materとの強い絆をあらためて感じられたことと思います。私も一、二回生時の諸氏と共にした貴重な時間の記憶を反芻しながら感慨に耽りました。今や斯界の中核となる年代、あまたの経験と研鑽とを積まれ、各地で活躍されている諸氏の仕事への自負と抱負が、愉快的スピーチの言外にもおのずから滲み出ていて、心強く思いました。十年後の同期会が一層の盛会であることを祈ります。



卒後20年同期会に参加して

兵庫県立大学大学院 教授
水野(松本) 由子



2012年1月7日にロイヤルオークホテルで、11期生の卒後20年同期会が開催され、38人の同期が集まりました。野崎光洋先生、土井田幸郎先生、林昭先生にご出席を賜り、スピーチをして頂きました。

先生方は、お年を感じさせない、若々しさで、大学時代に感じた先生方への憧れは、より強まりました。卒後20年振りに会う同期の皆さんは、外見も性格も学生の頃とあまり変わっていませんでした(相対的評価です!)。それでも、一人数分間の近況報告の言葉からは、20年間には、良いことも、

医11期生

第11期生卒業後20年 同期会にて再会を楽しむ

(医)青樹会小寺クリニック 院長
小寺 隆史



2012年1月7日、ホテルロイヤルオークにて滋賀医大11期生の同期会が行われました。卒業後20年の参加者は38名、内女性7名。先生方も元副学長の野崎先生、生物学の土井田先生、ドイツ語の林先生をお迎えしました。野崎先生は少々

の御病氣はされたものの主治医からは何をやってもよいと言われるくらい回復も順調で、最近ではテニスをされているとのこと。土井田先生は退職後、御専門である植物学を楽しまれ、近所の子供達とドングリの饅頭を作って一緒に食べるというような、愉快的生活をされているとのこと。林先生はハイネの詩、特に恋愛詩を読むことを楽しみとされ、悠々自適の生活を楽しんでおられる様子。同期生も、在学中の自分の写真がスクリーンに映し出される前で20年を振り返っての報告。仕事上の話題に加え、今回は趣味のこと、特にスポーツを始めたりしているという話が多かった。ヨット、テニス、マラソン、山岳スキー、トライアスロンに至るまで多種多様。健康維持を意識する年齢になってきたということなのか。女性陣は常勤、または非常勤で仕事を続けている人も多く、思ったより若々しく(失礼)元気な様子。また皆お互い顔を見ればすぐに名前が出て来るとも感じたようで、案外変わってないよね、という会話が多かった。それぞれ苦労もありながらも、生き生きとがんばっている様子が伝わりました。

寒い中出席していただいた、野崎先生、土井田先生、林先生、ありがとうございました。また忙しい中、準備をしてくれた幹事の石川君と福留君、そして事務局の方々、ありがとうございました。大変楽しい会でした。

辛いことも、たくさんあり、ひとつひとつを乗り越えてきたという自負が、伝わりました。医師として、社会人として、家庭人として、それぞれのやり方で、それぞれのやるべきことを実行してきたことに感銘を受けました。私は、滋賀医大卒業後、阪大で活動してきましたので、母校の温かさとパワーを実感できました。また、自分の精神科以外の科について、いろいろなことを教えてもらえることは、同期生ならでは、有り難いことだと思いました。皆さんと再会したことを糧に、これからも精進したいと思います。

■同期会 卒後10年会

卒後10年同期会に出席して



国立国際医療研究センター病院
耳鼻咽喉科
高原恵理子

まずはじめに、同期会を運営していただいた「湖医会」の皆様、幹事の皆様、休日にも関わらずご出席頂きました顧問の先生方、ありがとうございました。

卒後10年目の同期会。みんなどんな風が変わっているのだろうと思っていたが、いろんな場所で活躍したり子供がいたりしてはいてもみんな学生の頃と全然変わらず、大学時代に戻ったようで嬉しかった。

ひとしきり歓談が終わり自己紹介の時間。卒後の経過を紹介する間、受験票の自分の写真が後ろに大きく写し出され、会場は何とも言えない様々な反応。私としては田舎っ子丸出しの写真に「今と全然違うし見ないで!」と言わんばかりだったのに「ほっしー変わってないなあ」と言われてしまい、少しは垢抜けたのに…とちょっと凹んだ。

結局参加人数は35人程度と少なめで、会えなかった同級生が多く残念だった。20年目の同期会でもいろいろあるけど幸せに楽しくやってるよ、と言えるようにしたいと思う。10年後が今から楽しみだ。



医21期生



滋賀里病院
山田 麻紀

先日、卒業後初めての同期会が開かれた。出席者は35名。遠方に在住している人も多数あり、皆それぞれ診療や家庭のことで忙しい中よく集まったなあと思う。

10年ぶりに会った人も多かったが、見た目はさすがにまだびっくりするほどの変貌をとげているわけではなかった(その点では隣の会場で開催されていた卒後20年同期会の方が断然おもしろいだろうと思う)。ただ、順番に語られる近況報告の中に、中堅社会人として日々担っている役割や責任がにじみでていて10年の重みを感じられた。また当日は瀬戸先生、堀池先生、寺田先生が来賓として出席くださった。先生方の話口調や雰囲気は当然ながら昔と変わらず、なんとも懐かしい気持ちになった。

定年退職後ボランティアとしてモロッコに渡り、機材も人材もない中で研究を成し遂げて帰国された瀬戸先生をはじめ、3先生方ともに衰えぬ情熱と好奇心を豊富にもっておられる様子に接し身が引き締まる思いがした。次の同期会まで私も好奇心を忘れずに過ごしたい。



草津総合病院 小児科
森元まゆみ

楽しかったです。

みんな、全然変わってなくて、というか、女子はめっぽう美しく、男子は少し余裕がよく、つまりイイ感じに10年がたっていて、驚きま

した。近況話に花が咲き、同期っていいなあ、と温かい気持ちになりました。また、なつかしい先生方にもお会いできて嬉しかったです。

永遠のgentleman瀬戸先生からはJICAのお仕事をお話いただき、道具も人もないところで研究を立ち上げ、昔ながらの顕鏡と現代科学の遺伝子解析を合わせて結果をだされるなんて、凄いと思いました。蓄えとアイデアと根気、今後のキーワードにします。それいけ堀池先生の、全然変わらない若々しいお話ぶりには、笑ってしまいました。

Miracle寺田先生のお話は、奥が深いようなそうでもないような、うっとりした気分させていただきました。恩師の先生方を益々お慕い申し上げます。受付のくじ引きで当たった瞬間はやった!と思いました。執筆担当選びだったのですネ。私ごときで失礼いたしますが、感想文を提出させていただきました。同期の皆様、今後ともよろしくね。

同期会 卒後10年会

元気で、素敵な5期生でした



埼玉医科大学名誉教授
岡部 恵子

2012年2月11日(土)、「第5期生卒後10年同期会」が京都にて開かれました。ご招待頂いて出かけました。「まあ、よくぞ、10周年の同期会を開かれる!」という感激と、10年ぶりに会う元学生の皆さまとの出会いへの照れくささと、果たして私を覚えてもらえている

のかという不安とでおそろおそろ会場へ入りました。驚きました、70人のクラスの半数の37名の参加がありました。会場はエネルギーがいっぱいでした。あちこちで、賑やかな笑いがありました。お子さまを連れて参加の方々も沢山いらして、あたたかさが溢れていました。宴たけなわの中、1人ひとりの現状報告がありました。卒業後は、教え子としてでなく、対等の人間として、看護者仲間として出会えるに違いないと思っていましたが、それが間違いでないと実感しました。各々の職場で中堅者として、リーダーとして、活躍している「後輩」の素晴らしさ、すっかりと母親・父親になって人間としての豊かさをみせて下さった方々でした。幸せな一日でした。滋賀医科大学看護学科卒業生のこれからに大きな期待が持てました。このような会の幹事をしてくれた山下敬君ご苦労様でした。そして、ありがとうございました。

幹事10年目



今年もやってきました同期会。今年は10年目やし、先生呼んでちょっと盛大にやるで!と声を掛けたのが昨年末。インフルエンザの影響もあり、正直何人集まるか不安でしたが37人の同期生が集まってくれました。これだけ集まれば、店内はもう学生時代の教室のよう。思い出話

看5期生

大津赤十字病院 看護師
山下 敬

に始まり、仕事の近況報告から子育てトーク、旦那の愚痴?など、懐かしくて楽しい時間が過ごせました。皆がそれぞれの環境と立場で、それぞれの時間を過ごしていることを報告し、良い刺激とエネルギーをもらうことができました。

東京からこの同期会のためだけに、お越しいただいた岡部先生をはじめ、豊田先生、澤井先生、懐かしい先生方にお会いすることができて本当に嬉しかったです。ありがとうございました。

また次の同期会にも、皆が元気で会えることを楽しみにしています。

卒後10年の同期会に参加して



滋賀医大附属病院6C病棟
佐藤 幸子

私たちの学年は、幹事さんのはからいで毎年同期会が開催されているのですが、今回は卒後10年の節目、「湖医会」のご協力もあり、本当にたくさんの同期と再会することができました。恩師の岡部先生、豊田先生、澤井先生にもお会いでき、学生時代に戻ったような、とても楽しいひとときでした。

年々、職場では同期と接する機会が少なくなってきました。立場はそれぞれ違っても、同じような思い・悩みを持っている同期とゆっくり話ができる今回のような場は、とても貴重な時間でした。今後の進路に不安を感じていた私ですが、仕事に育児に奔走する同期たちの様子を知ること、私もがんばっていこう、と勇気づけられました。最後になりましたが、お忙しい中ご出席くださった恩師の先生方、同期会開催に尽力して下さった「湖医会」事務局の皆様、本当にありがとうございました。そして、今回だけでなく、毎年がんばってくれている幹事の山下くん、麻衣子ちゃん、いつもありがとう。



支部会

関東支部会 ①

関東支部会に参加して

公立陶生病院 消化器内科部長
清水 裕子 (医15期生)



8月20日東京品川で行われた関東支部会に初めて参加させていただきました。

毎年案内を頂いていたのですが、学生時代のことを思い出すほど日々の生活にゆとりがないし、支部会はもう少し年をとった人が行く会だろうし、名古屋から東京はすこし遠いな～(現在名古屋市在住)という理由で一回も参加しておりませんでした。今回は、職場に若手の先生が増えてやや生活にゆとりもできたし、そろそろ「少し年をとった人」にもなったし、翌日東京で所要もあるし、ということでこの機会に!と思い参加させていただきました。

この会に参加して驚いたことは、馬場学長が東京までこられて母校の現在についてお話をしてくださるともありがたい会であること、滋賀医大は国家試験合格率が全国一という素晴らしい大学であること、研究会や学会でよく講演をお聞きする朝比奈先生が滋賀医大の卒業生であったこと(講演会ではいつも高貴な印象ですが、とても愉快なお話しぶりでそのギャップにも驚き)、学生さんや研修医の方も参加されること(「少し年をとった人」の会ではなかった……)ということでした。

関東支部会は毎年お見えになれる先生方が多いようでとてもアットホームな雰囲気、私には初対面の方ばかりでしたが、大先輩の先生方から学生さんまで幅広い年代の方とお会いしいろいろな話をお伺いでき、たいへん楽しいひと時でした。学生時代のことなども本当に久しぶりに思い出していたのですが、実はこの会の3週間後に、勤務病院の病診連携の会に副学長の服部

先生がおみえになり御講演をお聞きする機会がありました。学生時代は「壊れかけたワゴンに乗っている先生」としか認識がなかった服部先生がこんなに素晴らしいお仕事をされているとは全く存知あげず、ときどき友人について行って研究室でお茶を飲ませてもらってばかりいて何の勉強もせず、今更どうにもしようがないことですが本当にもったいないことだったと思われました。

こうして今までは「母校の……」ということに全く関心がなかった私ですが、今回「母校の」大先輩方、お世話になった先生の聲咳に接する機会をいただき、私自身は滋賀医大になにかお返しすることはできなくても、全国で広く活躍されている先生方のためにも「滋賀医大」の名前に恥ずかしくないような仕事をしていかななくてはいけない、と身の引き締まる思いを感じています。

また、こうした支部会に若い先生方や学生さんにも「年をとった人の会」という偏見?(私だけか?)を持たず参加していただくと、きっと新しいインスピレーションをもらえると思いますので是非お勧めしたいです。

最後になりましたが関東支部会の際お世話になりました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

このたびはありがとうございました。(でも次回は関西の方で参加したいです……)



支部会

関東支部会 ②

特別講演

「肝臓病診療の未来」 ～肝炎・肝がんの制圧をめざして～

武蔵野赤十字病院 消化器科部長
滋賀医科大学 医学部 客員教授
朝比奈靖浩 (医8期生)



※筆者朝比奈靖浩氏は、平成24年4月1日付で東京医科歯科大学消化器内科・大学院分子肝炎制御学講座教授に就任されました。

この度は、関東支部会特別講演の機会を与えていただき、湖医会役員の皆様に心より感謝申し上げます。当日は、表題のタイトルで講演させていただきましたが、馬場忠雄学長や渡辺一良会長をはじめ多数の方々にお聞き頂き誠に光栄でした。

私が卒業した翌年の1989年にC型肝炎ウイルスが発見されると、肝炎・肝がん領域の病態解明や治療法の開発が急速に進んで来ました。私もこの医学の進歩とともに「ひとりひとりの患者さんを大切に診療すること、臨床上生じる様々な問題点を解決する研究をすること」を目標に臨床と研究に取り組んで参りました。幸い、素晴らしい指導医とスタッフに恵まれ、現在当科は一般病院では珍しく学会や厚生労働省における大切な仕事をさせて頂くようにまでなりました。

しかし、本領域ではまだまだ未解決の問題点は多く、全国には肝疾患で悩んでおられる方々が大勢いらっしゃいます。従って、「肝臓病診療の未来」には益々「若い力」が必要で、私は診療部長として若いスタッフが未来に向かって素晴らしい仕事ができるよう、しっかりと支えてゆきたいと思っております。そして、患者さんやそのご家族はもとより、医療にかかわる人々全てに幸せになっていただけるよう努力して参りたいと思っております。

当日は、馬場学長の強力なリーダーシップのもと、母校の皆様が益々発展している様子を拝聴し、とても誇りに感じました。私も滋賀医科大学で学んだ建学の精神を忘れず臨床・研究に励み、母校の発展に少しでもお役に立てられるよう精進いたします所存です。今後とも「湖医会」の皆様のご指導とご鞭撻を賜れば幸いです。

支部会

関東支部会 ③

関東支部会に参加して

医学科4年 北村明日香

この度、帰省中に関東支部会に参加させて頂きました。朝比奈靖浩先生のご講演を拝聴して、市中病院で臨床のみならず臨床に還元できる研究の2本柱をともに確立され、肝臓病分野で国際的に素晴らしい功績を挙げられていることを知り、感銘を受けました。滋賀医大卒の多くの先生方が、関東においても様々な領域で先達として活躍されている姿に、東京出身者として大変心強く感じました。先生方に直接お話を伺い、賜った数々のアドバイスは、私自身の将来の医師像を描く上で大切な道標となったように思います。学生に対してもこのような貴重な機会を設けて下さったことを心より感謝しております。

医学科4年 矢野 光一

自分が医師として働くイメージをなかなかもてない中で、医療現場で働かれている方の声を聞く絶好の機会だと思います。このたび、2011年の関東支部会に参加させていただきました。

最初は学長のお話があり、現在の大学の研究・財政など、普段の授業で聞くことのできない話題について興味深く聞かせていただきました。

次に、朝比奈先生の講演では、C型肝炎の研究についてお話を伺いました。内容はとても高度でしたが、非常に噛み砕いて説明していただいたので、学生の私でも理解することができました。

講演の後、OB・OGの先生方との懇親会があり、どの先生もフレンドリーに接してくださりました。そのおかげで、卒業後

の進路や臨床研修の質問を数多くさせて頂き、とても多くのことを教えていただきました。その他にも、堅苦しいお話だけでなく、砕けたお話もさせて頂き、非常に楽しい時間を持つことができました。

最後になりましたが、このたび関東支部会に参加させていただき、ありがとうございました。OB・OGの先生方の益々のご活躍をお祈り申し上げます。



支部会

鹿児島支部会の発足 ①

鹿児島支部会の開催

滋賀医科大学医学部の第1期生が守山市にある仮校舎に通い始めたのは、今から37年も前のことです。その後の滋賀医科大学のめざましい発展ぶりをみると、37年前を知る者として隔世の感があります。

そしてこのたび、旧第3内科、現在の糖尿病・腎臓・神経内科の西尾善彦先生が、鹿児島大学医学部の糖尿病・内分泌内科の教授にご就任されたという、滋賀医科大学にとって大変うれしいニュースが飛び込んでまいりました。

この大ニュースを知って、鹿児島県内で奮闘されている滋賀医科大学卒業の先生方に声をかけ、一堂に会して西尾先生の教授ご就任のお祝いをしよう。そして、今後も会う機会をつくりやすいように、滋賀医科大学同窓会鹿児島支部会を発足させようと思ひ立ち、2011年11月12日土曜日に鹿児島市内で鹿児島支部会を開催しました。

愛甲医院 理事長 迫田 悟(医1期生)

現在、鹿児島県内には12名の滋賀医科大学卒業生がそれぞれの分野で活躍中です。当日は10名の先生方がお忙しいなかを出席されました。また、遠く滋賀県からは同窓会長の渡辺一良先生がお越しになりました。鹿児島県在住の出席者一同は、渡辺先生の同窓会に対する熱い思いを肌で感じました。会場では西尾先生や渡辺先生を囲んで、母校の最新の情報や鹿児島大学の話題などで話が弾み、時がたつのをつい忘れてしまいました。

卒業年度が違って、初めてお会いする先生でも、距離感なく話ができる同窓会のよさを肌で実感しました。次回、また会いましょうと約束して、鹿児島随一の繁華街である天文館の地を後にしました。



支部会

鹿児島支部会の発足 ②

鹿児島支部会の誕生に立ち会って

「湖医会」会長 渡辺 一良 (医2期生)

さる11月12日土曜夕刻、鹿児島市天文館の静かなお店に滋賀医大出身の9名が集まり、「湖医会」の鹿児島支部が立ち上げられました。

以前から鹿児島県在住の滋賀医大出身者で一度集まろう、という声はあったのですが、このたび本学第3内科出身の西尾善彦先生(5期生)が鹿児島大学の内科学教授に就任されたのを祝いし、激励しようとの思いで、1期生の迫田さん、田畑さんらが呼びかけ人となって実現したものです。

「湖医会」としても、地方ごとに支部会組織を立ち上げてほしいと願っていた矢先でしたので、小生は大事な研究会への参加予定(?)を急ぎよ取りやめて、鹿児島まで飛ぶことにしました。

会場に着いて見渡しますと、1期生の長老組だった田畑富士雄先生、がっしりした迫田悟先生は本当に懐かしく…それもそのはず当時全学で200人の濃厚なお付き合いでしたから。

3期で鹿大外科入局の中野静雄先生、宇治から島に渡った4期の島袋盛一先生、南国の糖尿病治療にあつい思いを抱く5期の西尾善彦先生(鹿大新教授)、入学は同期の木建直哉先生など最初は記憶も曖昧でしたが、焼酎の酔いとともに学生時代の顔や様々な出来事がアルバムのページをめくるように思い出され、話に花が咲きました。



中堅では3年前に『湖医会賞』を受賞した河野史代さん(7期生)と、ラグビー部OBで肝臓内科医の小森園康二君(7期生)らが出てきてくれました。また若いところでは27期の吉井理一郎君も滋賀医大で前期研修を終えてから鹿大整形外科で後期研修に励んでいるとのこと、みな将来が囑望されます。

1期生の田畑先生が鹿児島大学外科に帰ったせいも、後輩は同外科へ入局した方が多かったようです。中でも河野さんに至っては、伝統ある鹿児島大学外科講座の歴史の中で、なんと女医第1号だったそうで、これには受け入れる教授も相当戸惑われた、その当時の苦労話を後からいろいろ聞かされた云々。

若い人が卒業して地元に戻ろうとするとき頼るのはやはり、同窓の先輩です。このような点からも地方支部会の立ち上げは意味があるなあと感じた次第です。

来年以降もまた集まれるよう話しつつ、天文館の街を二次会へと移動したのでした。



支部会

保健師部会

3年目の交流会

大津市健康推進課
中川 拓也(看12期生)

保健師交流会への参加は今年で3回目となります。毎回集まる顔ぶれが変わる中で、色々な先輩方の貴重な話を聞かせてもらったり、後輩の頑張っている姿を見させてもらうことを楽しみに参加させていただいています。今年は前回よりも参加者が少なかったのですが、前回お会いできなかった泊先生や、育児休暇中でありながら参加していただいた1期生の先輩とお話ができ、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。同じ保健師として違う場所で働かれているお話を聞くと、今自分がイメージして実際に働いている保健師の姿とはまた違った面が見えてきて、「こんなこともできるんだな」と再発見させられることばかりです。自分で



も今の保健師の立場でもっとできることがあるのではないかと考えさせられて、今後の保健師活動への励みにもなりました。また、大学卒業時点で保健師の道を選ぶ学生さんが少なくなってきた現状を聞き、日頃からもっと保健師の良さをアピールしていく必要があるのかな、とも感じました。ここ3年は卒業生の参加のみとなっているので、次回は在学生からの参加者が増えるようにできればいいなと思います。保健師交流会を開催するにあたって、毎年ご協力いただいている滋賀医科大学同窓会「湖医会」の皆様にはお礼を申し

上げます。私も保健師部会の発展させるために、でき得る限りの協力をしていきたいと思っています。

初めて参加させていただいて

京都市東山区役所 健康づくり推進課
湯川 紗代(看13期生)

今回初めて保健師部会の交流会に参加させていただきました。初参加の場で幹事をさせていただくことになり、「準備不足は無いだらうか」「どんな雰囲気なのだろう」「何を話せばいいのか」と不安を抱えての参加となりました。当日は雪が降り積り、電車が大幅に遅延する中での開催となり申し訳なかったですが、順々に到着されると同時に自然と交流が始まり、とても楽しく充実した会となりました。泊先生を始め、ご参加いただいた皆さまに感謝を申し上げます。保健師2年目として、自身の携わっている事業が他都市ではどのように運営されているのか興味がありましたので、先輩方からお話がうかがえて大変印象的でした。保健師業務に関

する話はもちろんですが、滋賀医科大学の学生時代の話でも盛り上がり、懐かしく温かい気持ちになりました。参加者が5名と少人数にはなりましたが、とても有意義な時間が過ごせたかと思っています。和気あいあいとした交流会ですので、次年度はお心当たりの保健師さんをお誘い合わせのうえ、より多くの方にご参加いただければ、と願っております。今回の交流会を開催するにあたり、滋賀医科大学同窓会「湖医会」の皆さまには案内の送付を始め、お力添えをいただき深くお礼申し上げます。今後の保健師部会の更なる発展に向けて尽力していければと思います。



A Japanese in Pittsburgh

Research Assistant Professor of
Neurological Surgery, University of Pittsburgh

叶 秀幸 (医17期生)



この度「湖医会」30周年の湖都通信記念号への寄稿をさせて頂く機会を賜り、大変光栄に存じます。現在、私はアメリカ東部ペンシルバニア州のピッツバーグに暮らし始めて早5年、一昨年には永住権を取得しました。「ピッツバーグ」と聞いて鉄鋼業のイメージをされる方も多いかと思いますが、今では医療やハイテク産業で知られ、全米で最も住みやすい町ランキングの1位に選ばれるほど、物価・治安・交通等が安定したとても住みよい町です。私もこちらの生活には随分慣れてきたものの、昨年購入した家と日本の住環境とを比較し、最近でも新たに気付かされること、驚かされることばかりです。こちらでは、新築の家を購入する人はほとんどいません。中古の家をリノベートしながら、100年以上も使い続けるのが普通です。街中の家は日本のように隣家に近接し、小さめの庭が付いているだけですが、郊外の家は複数のバスルーム付きで、一面芝生の広大な庭が当たり前です。私はせっかくだと思い切ってアメリカで家を購入するのであれば、アメリカらしい場所にアメリカらしい家をと、郊外に家を購入しました。(気になるお値段ですが、日本の街中にある高層マンションより安いぐらいです。)毎日裏庭にやってくる野生のリスや鹿をウッドデッキから眺めては癒されております。アメリカ人は開拓者の子孫だけあって、家のメンテナンスを趣味としている人が多いですが、私にはなかなか真似が難しく、春から夏にかけて毎週末芝生をトラクターで刈る作業、秋の落ち葉掻き、冬の雪かきなど、慣れない作業に四苦八苦しております。また、大雨の後に地下室から溢れる水のトラブルやしばしば起こる停電など、日本ではあまり経験したことのない災難も多く、当たり前だと思っていた日本のライフラインの信頼性の高さを誇らしく思うほどです。

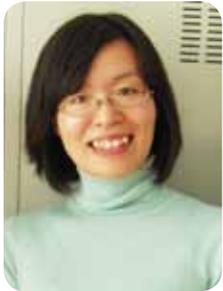
さて、近況をこの場をお借りしてご報告させていただきます。私は滋賀医科大学卒業後、京都大学脳神経外科へ入局し、関連病院から京大大学院博士課程へ進学、PhD及び脳神経外科専門医を取得後、ピッツバーグ大学脳神経外科へフェローシップのために渡米しました。ピッツバーグ大学は移植手術などでも有名ですが、脳外科の分野ではガンマナイフのパイオニアとして知られています。私は渡米当

初、言いたいことも十分に言えない自分の英会話能力を鑑みて、机にかじりついて論文を書くことに集中しました。その甲斐もあって、渡米後1年で、ピッツバーグ大学脳神経外科のResearch Assistant Professorというポジションを得、以来ガンマナイフの臨床研究を主に行っています。他にも多施設共同研究のProspective studyにおける主任研究者も任され、世界各国から集まる脳外科医や医学部生の研究の指導にも力を注いでおります。ピッツバーグ大学は、ガンマナイフの症例が豊富で、かつ詳細に経過観察がなされているため、この5年間に論文を多数執筆することができました。現在、脳神経外科の主要雑誌であるJournal of NeurosurgeryやNeurosurgeryを中心に70本余りのPeer reviewed articleに名を連ね、うち半数近くが筆頭著者、残りの大半も第二著者として貢献しております。また、米国では例え外国人であろうと、英会話能力が劣ろうと、自分にしか出来ない得意分野を持っていれば、そのいいところを周囲が伸ばそうと手を差し伸べてくれます。そのような環境が私にとって大変働きやすく、現在に至っております。

2010年と2011年の夏には、滋賀医科大学脳神経外科教授、野崎和彦先生のご紹介により、ピッツバーグ大学脳神経外科にて、滋賀医大4年生の海外自主研修の一環として、後輩諸君の研修指導をさせていただきました。後輩諸君と懐かしい滋賀医大の思い出話をしながら、「僕が学生だった時には…」などと年寄りめいたことを思わず何度も口にしてしまい、時の経つ速さを痛感しております。

最後になりましたが、滋賀医科大学のますますのご発展を遠くから祈念しております。



海外からの
メッセージmongol ulsaas "Sain baina uu?"
モンゴルから「こんにちは」

青年海外協力隊 保健師
モンゴル・バガノール地区健康センター 上岡有智子(看9期生)

「湖医会」創立30周年おめでとうございます。このような記念号に寄稿させていただく機会を与えてくださり、ありがとうございます。

原稿を書いている2011年12月現在、私は青年海外協力隊の保健師としてモンゴルの地方都市で働いています。卒業後たった5年ですが、随分昔のように感じるのは異国にいるためかもしれません。個人的な印象ですが、滋賀医大の卒業生には国際協力分野で活躍されている方が意外と多いようです。私自身もそうした先輩方からお話を聞き刺激を受けたことを思い出し、今回、モンゴルでの活動を紹介することで僅かでもお返しになれば幸いです。

モンゴルは中国とロシアに挟まれた人口約260万人、面積156万6500km²の国です。日本の約4倍の土地に、滋賀県の約2倍弱にあたる人々が生活しています。夏は気温30℃、冬は、極寒マイナス30℃と年間の寒暖差が激しく、冬はバナナで釘が打てます。主食は小麦と肉。羊、牛、馬、山羊、ラクダの肉があり、肉がないものは食事とは呼ばないほど、とにかく肉をよく食べます。経済的には1990年の民主化以降、レアメタルなど鉱物資源の開発で順調に発展しており、首都も地方も建築ラッシュで日本にはない勢いが感じられます。モンゴル出身といえば元横綱朝青龍が挙がると思いますが、モンゴル人に日本の有名人と聞くと日本人力士が挙がります。相撲は生中継されるほどポピュラーで、非常に親日的な国です。

保健医療状況を一言で表せば「もう一步!」。保健指標を見ると、平均余命67歳、5歳未満死亡率(出生千対)29、



合計特殊出生率2.0、妊産婦死亡比(出生10万対、2005-2009)81(ユニセフ、世界子供白書2011より)となっており、着実に改善しつつ

あります。プライマリーケアを担う診療所(家庭病院)から高度医療の首都国立病院という医療システムがあり、公的医療保険、年金などの保健福祉制度も整備されています。しかし、機関連携が不十分であったり、財政基盤が弱く実際には福祉制度を利用できない、周知不足といった課題も見られます。制度や法律だけが先行し、現実が追いつかないことが多いようです。医療サービスや保健関連事業も同様で、少し工夫すればもっと改善されるのでは?と思われる事がしばしばです。私は、そんなモンゴルの田舎町の公立病院に派遣されています。患者・住民対象の健康教育教材を作成したり、実際に外来や学校などで健康教育を行いながら、実行可能で行動変容につながる方法をモンゴル人の同僚と一緒に模索しています。ただし、ボランティアという気安い立場なので「何でも屋」的にPCなどの修理、翻訳、果てはベビーシッターまで頼まれることもあります。医師からエコーに関する大量の文献を翻訳してほしいと頼まれた時には、さすがに断らざるを得ませんでした。

まもなく2年の任期を終えますが、この間、私自身が多くを学びました。予算はないが、どこから何を始めてもよいという状況で、保健師、ボランティアとして何ができるか、何をすべきか必死に考えました。結果、悩みながらも専門職としての力量や信念、コアとでも言うものに向き合うことができました。また、モンゴル人の同僚と築きあげた信頼関係が一番の成果であり、そのプロセスは「信頼」の難しさと重みを教えてくれました。育った環境、文化が違っても、その違いを認めながら分かり合えた経験は、今後の私の支えになるでしょう。

最後に、ここまで読んでいただいた学生の皆さんには、今、目の前の事柄を十分楽しんで吸収されることをお勧めします。学生生活、アルバイト、講義、実習、人との出会いなど全てが、不思議なつながりでモンゴルでの活動に生きて、無駄は一つもなかったと実感しているからです。これはおそらく海外でのボランティア活動に限らないだろうと思います。そして、先生、先輩方には、この場を借りて深く感謝を申し上げますとともに、ますますのご活躍と滋賀医大の発展をお祈りいたします。

私の研究から

イグノーベル賞 受賞に寄せて



医療法人明和会 琵琶湖病院 診療部長
滋賀医科大学 精神医学講座 非常勤講師(診療) 村上 純一(医21期生)

2011年9月、イグノーベル化学賞を、精神医学講座今井講師ほか7名と共同受賞しました。テーマは、「わさびスプレーを用いた非常用警報装置の開発」です。この装置は、聴覚障害を有する方や難聴の高齢者を想定したものです。この機会に、聞こえに悩みをもつ方の災害時への備えの大切さを知っていただき、この技術が皆さまのお役に立てると嬉しいです。貴重な経験ができた事に、研究にご協力頂いた皆さまに感謝いたします。

イグノーベル賞とは、「まず人々を笑わせ、その後に考えさせる」研究に与えられる賞です。ignoble(恥ずかしい)という言葉が掛けているとも言われています。本家ノーベル賞とは違い賞金は無く、授賞式参加費用も全て自腹です。

事の始まりは、数年前に遡ります。香りビジネスを展開するシーム株式会社から、「わさびの臭いを使った非常警報装置を開発中であり、実際に睡眠中のヒトでの効果を検証してほしい」と打診されたのです。実用化に向けて、防災関連メーカーであるエアウォーター防災のチームも携わっていました。今井講師と私はこれまで、睡眠障害に関する臨床研究や、脳波など、生理学的手法を用いた基礎研究に取り組んでおり、時折このようなユニークな依頼が舞い込むことがあります。

わさびには、アリルイソチオシアネート(AIT)という、あの「ツーン」とした辛みをなす成分が含まれています。スプレーはAITを含有するガスからなり、実際に体験すると、眼や鼻の粘膜を刺激し、いかにも目が覚めそうでした。なおAITは嗅覚ではなく、痛覚に働くことが分かっています。

早速今井講師を中心に、脳波で睡眠段階を判定しながらわさびスプレーを噴射し、覚醒まで経過をみる実験計画が組まれました。聴覚障害を有する方、ない方ともに参加者を募りました。睡眠実験では、時に参加者募集に苦労します。今回は変わったテーマのためか、多くの方に応募頂きました。

参加者と開発チームは夜な夜な、病棟の睡眠検査室で実験しました。ヒト睡眠研究の苦労の一つに、参加者が眠れるかという点があります。非日常の環境の上、「眠ったらそこでわさびスプレーが噴射されますよ」と告げられているわけで、普段寝付きが良い参加者も、全く寝付けないことはざらです。静かなモニタ室にいる私たちがうたた寝しかねません。やっと入眠を確認し、噴射音のみによるダミー刺激の後、噴射ボタンを押します。解析すると、鼻づまりの方1名を除く殆どの参加者が数十秒でスプレーにより覚醒し、聴覚障害のある群が、ない群より有意に短時間で覚醒するとの結

果が得られました。

さて、授賞の報は授賞式の3ヶ月ほど前に今井講師の元に届きました。私たちはイグノーベル賞の名を漠然としか知りませんでした。やがてこれは妙なことになったという困惑と、嬉しさが入り交じった気持ちになりました。

授賞式会場は、米国マサチューセッツ州ボストンにあるハーバード大学、サンダースシアターという古い講堂でした。受賞スピーチの他にも、ユニークな科学実験、寸劇、ミニオペラなど盛り沢山で、とても知的で楽しいイベントでした。受賞者は賞の主旨に則って「笑いをとり、かつ考えさせる」スピーチを求められます。WASABIというニッポンの食材が研究材料になったのが興味を引いたのか、予想以上に笑いを誘っていました。今井講師がスピーチを、私たちはちょっとしたパフォーマンスをして、まずまず無事に賞を頂きました。ノーベル賞化学賞の受賞者と握手できたのも、大変嬉しい思い出です。

今回は普段お会いすることのない様々な方と出会い、面白い経験ができました。本来、研究は大変地味なものです。これまで好奇心のままに研究を続け、お蔵入りの研究が数多な一方で、まさかこのような形で知っていただく機会を得るとは夢にも思いませんでした。医学研究をより身近に、自由に感じていただければ何よりです。

大津ファミリークリニック

谷口 洋貴 (医15期生)

開業 苦勞 ばなし



総合診療・地域医療・ 家庭医療にどっぷりと

みなさん、ご無沙汰しています(とは言うものの、大半の方々には初めまして、ですが)。医学科15期生の谷口洋貴と申します。1995年に滋賀医大を卒業し、以来ほとんど大学に足を踏み入れないまま17年が経とうとしています。どこの医局にも属さないまま風来坊のようにさまよっていつの間にか、湖都・大津に舞い戻ってきていました。そんな私に「湖医会」30周年記念の湖都通信記念号への原稿依頼を頂き、ぼくでいいのかなあ、と思いながらキーボードを叩いております。

先にも書きましたように1995年に大学を後にしたぼくは、天理よろづ相談所病院ジュニアレジデンスの門を叩きました。天理は当時数少ない総合診療の研修ができる施設でしたが、ぼくは総合診療を専門にしたいと明確に意識もしておらず、どちらかという外科医志望でさえあり、最初は広くいろいろ知りたい、という程度で始めた初期研修でした。しかしその天理で研修していくうちに総合診療を生業としようと思ったわけです。当時はまだまだ総合診療の認識は低く、誤解・偏見も多くありましたし、さらに初期研修を終えた当時のぼくにとっては、総合診療の守備範囲はとても広いものでした。

しかし地域の医療崩壊や救急外来への患者さんの増加に伴い、広い意味での総合診療医の必要性が叫ばれ、さらに救急がER型が主流となり、外科医のみならず総合診療医も救急の担い手の中心になっていっている現況をみると、当時の自分の選択は誤っていなかった、と胸をなで下ろしています。そしてまさか総合診療がドラマのテーマとして成り立つとは、と驚いています。診断推論をあーだこーだとブラウン管でも、見せ場はないし視聴者は何もおもしろくないだろうな、と総合診療を専門とする他の友人達と語っていたくらいです。やはり医療ドラマは颯爽と手術をする外科医、修羅場をかいく

ぐる救急医が花形であったように思います。それどころか、総合診療をテーマにしたエンターテイメントまで放映されるに至りました。NHKの「総合診療医 ドクターG」がそれで、非力でありながら私にも白羽の矢が立って、昨年出演させていただいた次第であります(9月15日放送「腹が痛い」を担当)。

現在であっても日本の総合診療医の位置づけが欧米ほど明確でないのですが、先述した地域医療や救急医療の立て直しのために、総合診療医を育てふやしていかないといけない、という使命感にかられています。総合診療医といっても大きく病院医と家庭医の2つに分けられ、今は後者の育成に尽力しています。在宅診療は決してつまらないものでもおざなりなものでもありません。大変な面はありますが、やりがいのある医療です。患者さんの家にはCTもMRIもありません。診療するにあたって頼れるのは自分の知識・経験・診察技術だけです。それがドクターGに出演させていただくにあたっての自分のメッセージのひとつでした。

亡くなる方の80%が病院である現在の日本、やはり一人でも多く住み慣れた自宅へ戻っていただいて最後のお世話取りをさせていただけたらと思います(ただ近い将来嫌でも在宅ターミナルケアなど在宅での看取りや診療が増えていくと予想されますが)。

もちろん、皆がみんな在宅で亡くなることができるわけではありませんが、退院後在宅診療という選択肢がある、ということが意外と知れ渡っていないので、どんどん考慮頂けたら、と切望しています。

私の取り留めのない稚拙なこの文章を最後までお読み頂いた皆様に、お願いをさせて頂いて手を休めたいと思います。

東日本大震災あのととき

東日本大震災に放射線測定、医療チームとして参加



金沢大学 核医学診療科 松尾 信郎 (医11期生)

2011年3月11日午後2時46分の大地震に伴う福島県原発事故により放射線測定の必要性を生じ、文部科学省からの依頼で私が医師として現地に赴いた。放射線技師、事務員、看護師とチームとして活動した。3月15日に原発の水素爆発があり原発周辺が一時400mSv/hとなった直後の出発となった。富田病院長や絹谷教授、多くの病院関係者の壮行会のあと3月16日水曜日午後8時19分に金沢大学病院を出発し、新潟県内の米山SA内駐車場で車中泊の翌朝6時に起床し、12時には福島県被ばく対策本部のある福島県自治会館に着いた。我々は本部から指示された被ばく拠点施設のパレット福島で医療と被ばく者の放射線サーベイランスを行った。福島市内では23 μ Sv/hであった。2000人以上の被災者が所狭し体育館や廊下にシーツを敷いて寝ている状態であった。会場の屋根の電球が落ちて床にちらばっている状態で、屋根はひびが入っていた。100人以上の人々の診察希望があり時間の許す限り、ペースメーカー術後患者、風邪、糖尿病、高脂血症、心臓病、アレルギー性鼻炎、精神的不安の強い人、高血圧、被曝の不安がある人などの診察を行った(図1)。高血圧性緊急症の患者はCa拮抗薬と安定剤の投与とともにすぐに病院受診の必要がある者については

近医に紹介した。頻拍を伴う高血圧が多く遮断薬が有用と感じた。本部での全体リーダー会議を終え断水中のホテルに入ったのは午後11時であった。3月18日朝本部から指示されたのは、福島県立会津学鳳高等学校、会津高校の放射線測定と医療ニーズへの対処で、学校長、教頭に挨拶した後に会場の設置、放射線サーベイランスを実行した。100,000cpm以上を被曝有りと定義しカウント測定後に現地の人に証明書を発行した。幸い汚染者は無かった。午後5時に本部に帰り、本部厚生労働省医政局災害医療対策室近藤氏に2日間の現地の現状と問題点、川内村村長や校長の感謝の意があったことなど報告した。福島県会津若松市内のホテルで除染し金沢へ帰還した。私の線量計は32 μ Svで被曝はなかった。

被ばく医療と医療支援は自己完結型でなくてはならない。想定される余震や二次災害、放射線への監視などを行いつつ、スタッフと自分の身を守るための情報を常に確保する必要がある。核医学の知識をもった医師が原発事故での被ばく医療でできることは多く、臨床医は現地に赴き原発事故によって生じる様々な問題に対処できる可能性がある。



気仙沼ボランティア記

公立甲賀病院(統括DMAT) 渡辺 一良(医2期生)

東日本大震災当日、当院からはDMAT仲間の5名が出動しましたが、私は勤務のやりくりがつかず、病院に残り後方支援に当たりました。

それから約3週間後、家内がお世話になった気仙沼の牧師さんご夫婦と連絡がつき、教会が物資配給場所となっているが、おむつなどの日用品が不足しているとの情報に接しました。これを聞いて、我が家でも物資を大量に運び込んで手伝いに行こう、ということになりました。勤め先にボランティア休暇を申請し、ご近所に声をかけて眠っている家庭用品を提供してもらい、それでも足りないものはスーパーに買いに走って、さらに食糧、寝袋、ガソリンなどを我が家のワンボックスカーにぎゅうぎゅうに詰め込んで、長男とわれわれ夫婦の3人で夜中に出発したものです。

物資が足元から天井までぎっしりなので身動きできず、ルームミラーで後方確認ができません。高速道をひた走ること14時間、翌日午後、なんとか気仙沼の教会に到着できました。

それから2泊3日の間、教会の2階で寝起きしながら全国から集まってくる物資を分類し、続々と受け取りに来る避難者の方々に配布する作業を手伝いました。

私は勤め先の病院長から依頼されて、被災した市立本吉病院の視察にも出かけました。教会を半日離れ、寸断された道路を迂回して、同院の事務長さんと徳洲会TMAT隊員等から実情を聴き写真に収めました。道



鉛のように捻じ曲げられた軌道



転がされた家屋



教会での物資配布場所



物資を選ぶ方々

中、レールがめくれ上がった三陸鉄道やおもちゃの家のよう転がされた家屋など、海沿いの被害状況を目の当たりにしました。

夕方教会に帰ってみると薄暮の中、中型トラックに屋根の上まで支援用の毛布を積んだ東洋系らしき外人グループが到着して、賑やかに荷卸しをしている最中でした。搬入を手伝ってから聞くと、自分はバングラディッシュ人で、子供の頃に伊藤という名の日本人に助けられて大学まで出してもらったが、兄弟の大半は餓死した。自分たちはクリスチャンであるが教会には属さず、メーカー各社から大量の支援物資を調達し、それをトラックに積み込んで東北の各地へ届けている、これで60時間まともに寝ていない。でもトラックが空になったのですぐに東京へ帰ってまた物資を積み込み次の配給所へ向かうんだ、とのこと。

こんなことを聞いているうちに、自分が恥ずかしくなりました。遠路はるばる荷物を満載してやって来て一助になったかな、と満足していたけれど……。事実、われわれが持ち込んだあの荷物は、翌日の配布でほとんど空っぽになっていたのです。

宗教に裏打ちされた人の強さは、「神に尽くすように、人に接しなさい」という教えに基づいているものと思われました。70歳を超えた牧師さん夫妻の生き方、接し方を見ていると、そう考えるより説明が付きません。ある種のカルチャーショックを覚えつつ、こちらがとても清新な気持ちをもって、帰宅の途に就いたのでした。

東日本大震災あの日とき ～滋賀医科大学の支援活動～

DMAT1隊が花巻空港に、救護班4チームが会津若松市に、心のケア2チームが伊達市、福島市に、医療支援チーム3チームが石巻市に、それぞれ出動し支援活動を行いました。(延べ48名)



東日本大震災義援金に寄附

同期会(医10期・11期卒後20年会、医20期・21期卒後10年会及び医5期のつどい)の剰余金 594,394円を、東日本大震災義援金として日本赤十字社を通じて寄附しました。

学生表彰(平成23年度)

●男子バレーボール部

第7回日本医歯薬大会 優勝

●ハンドボール部

第63回西日本医科学生総合体育大会 優勝

●ヨット部

第63回西日本医科学生総合体育大会 470級 優勝



●高田 真央(水泳部)

第63回西日本医科学生総合体育大会
女子200m個人メドレー 優勝

●満田 雅人(ハンドボール部)

第63回西日本医科学生総合体育大会
ハンドボール MVP

●上林 翔大(ハンドボール部)

第63回西日本医科学生総合体育大会
ハンドボール ベストキーパー賞

●林谷 俊和(陸上競技部)

第63回西日本医科学生総合体育大会 砲丸投 優勝



●アカペラサークル(食後3錠)

フジテレビの全国ネットの音楽番組「ハモネブ」に、全国563グループが参加した予選を勝ち抜き、本戦決勝最終4組のひとつに選出され、滋賀医科大学の名を全国に知らせた。

●国際保健・地域医療研究会TukTuk

東日本大震災直後から、多くの部員がボランティア活動を行い、所属学生以外の本学学生ボランティアの調整役も行い、また、災害に関する学習会を開催し、この活動はマスコミ等にもとり上げられた。

●野田 晶子(医学科第5学年)

第1回アジア太平洋合同PBL会議2010の「Students' Perspective(学生の視点)」領域で、口頭発表した演題:Removing Barriers to More Effective PBL:が優秀な発表として表彰された。



2011年度 「湖医会」 総会 議事録

日時

平成23年10月29日(土)
15:05~16:10

場所

基礎実習棟B講義室

※ 各資料は「湖医会」HPを参照

■審議事項

1. '10事業報告及び'10決算について

原案(資料1-1、1-2)どおり承認された。

2. '11事業計画及び'11予算について

原案(資料2-1、2-2)どおり承認された。

また、創立30周年記念事業については、特別会計「記念事業積立費」から、Home Coming Dayに100万円、課外活動助成に300万円、各期卒業記念品メンテ費補助に100万円をそれぞれ計上することが承認された。

3. 規程の改正、制定について

会則の一部改正 原案(資料3-1)どおり承認された。

奨学金規程の一部改正 原案(資料3-2)を一部修正のうえ承認された。

会費等規程の制定 原案(資料3-3)を一部修正のうえ承認された。

4. 役員の改選について

選挙管理委員会から役員選出規程に基づき選挙公示を行ったが立候補者がなかったことの報告があり、幹事会から提案のあった役員候補者名簿(資料4)のとおり承認された。事務局担当副会長には相見副会長が選出された。

■報告事項

1. Home Coming Dayについて

大学との共催で実施すること及びプログラム(資料5)の内容について報告があった。

2. 支部の設置について

鹿児島県内に勤務又は在住する会員を構成員とする「鹿児島支部」の設置が幹事会で承認された旨の報告があった。

編集後記

「湖都通信」
編集委員長

乾 武広
(医8期生)



寒かったこの冬、ようやく花のたよりも聞こえてくるようになりました。

1月に開催されたHome Coming Dayでは、久しぶりにお会いした懐かしい顔がたくさんありました。

今回の「湖都通信」記念号はいかがでしたでしょうか。同窓会創立30周年記念事業のひとつとして刊行しましたが、多くの会員から寄稿いただきましたのでヴォリュームのある「湖都通信」になりました。

これまでは、同窓会事務局に協力をいただいて、手作りの同窓会新聞のように刊行してきましたが、30周年の節目として今後は更なるバージョンアップを図り、装丁も新たな「湖都通信」を刊行していきたいと考えています。

しかしながら、内容は会員皆様の寄稿や記事が主体であることには変わりありません。苦労話や近況、自慢話など何でもかまいませんので、我こそはと思う方はふるって記事を投稿いただきますようお願いいたします。